

大空 (生徒・保護者向け) 65号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 校長通信

令和4年3月30日(水)

ノブレス・オブリージュ—高貴な者の義務(離任式挨拶)

□本日の概要

- noblesse obligeはフランス語で、貴族、あるいは高貴な者の義務と解釈されているが、民主主義の現代に於いては、「役割に応じた責任」、あるいは「全体に奉仕する」という意味だと考えることができる。
- 中高生のノブレス・オブリージュは学ぶことである。努力から逃避してはならない。
- 自分の感受性は自分で守って欲しい。人のせいにしてはならない。
- 本日のNFC 感性 主体性 自他肯定力 想像力

□ノブレス・オブリージュ(高貴な者の義務)

「ノブレス・オブリージュ」という言葉を知っていますか。noblesse obligeはフランス語で、一般的に貴族、あるいは高貴な者の義務と解釈されています。社会的地位の高い者はそれにふさわしい義務を負ってしかるべきであり、彼らは一般の人よりも多くの規範に従うなどの責任を担うという意味です。

この言葉を表面的に理解すると、身分制やエリートの優越感を肯定するだけに終わる危険がありますが、現在の民主主義の社会に当てはめるなら、誰でも、例えば、家族やクラスや学校などの小さな集団であっても、必ずその役割に応じ何らかの責任を負わねばならない、そう理解することができると思います。

つまり、人は、誰でも背負わなければならない「義務」があるのです。皆さんは中・高校生ですが、これはいわば特権階級です。昔で言えばエリート、江戸時代なら武士です。なぜ特権階級かと言うと、「働かなくて良い」からです。逆に言えば、皆さんは、中・高校生という特権階級だからこそ背負う義務があり、それは「学ばなければならない」ということです。

働くことを「勤務」といいます。「勤」も「務」も、訓読みは同じで「つとめ」です。「つとめ」とは、「その人の役目として当然果たさなくてはならない任務、義務」という意味です。つまり、「ノブレス・オブリージュ」なのです。

哲学者の内山節は、「昔の日本の農村では、村人は『仕事』と『稼ぎ』という言葉を使い分けていた」と言っています。「仕事」とは、村で暮らす以上、当然、為さねばならないことです。例えば、田んぼのあぜ道を直したり、草刈りのような協同作業や、寄り合いに出席したりなど、共同体で暮らすため、全体に奉仕する作業を「仕事」というのです。それに対して、「稼ぎ」というのは、取りあえず「現金」を得ることが目的の行為で、例えば、「うちの息子は、東京さ稼ぎに行っている」という風に表現し、決して「仕事」とは言いません。「仕事」の「仕」は、訓読みで「仕える」、つまり、全体に奉仕するという意味です。本来の「仕事」とは、個人の利益のためでなく、全体に奉仕することで、ノブレス・オブリージュ、つまり「つとめ」と同じ意味が込められているのです。

繰り返しますが、皆さんの「ノブレス・オブリージュ」は学ぶことです。学生は、文字通り「学んで生きる」存在です。勉強が苦しいとか、環境が悪いとか、人のせいにしてください。人のせいにして、君たちの務めから逃げないでください。努力から逃避しないでください。

さて、いよいよお別れです。私は、2年間、様々なことを語ってきましたが、大きく分けると以下のことを繰り返してきました。

- ①主体的に生きること
- ②他者が自分を支えてくれていることを自覚すると共に、他者を支える人間になろうとすること。
- ③自分の中の様々な分人を大切にすること。
- ④試練に立ち向かい、努力を継続すること。
- ⑤美しい言葉を大切にすること。

最後に茨木のり子さんの詩を紹介いたします。私が初めてこの詩を読んだ時、茨木のり子さんにほつべたを殴られたかのような衝撃を覚えたことを覚えています。厳しい詩ですが、自分の感受性は、自分で育て、自分で守らなければなりません。私は、自分が弱気になったときこの詩を読んでいます。

私は宮崎西高校・附属中学校を去りますが、見えない手となって、君たちの努力を応援し続けます。頑張ってください。

□自分の感受性くらい

自分の感受性くらい

茨木 のり子

ばさばさに乾いてゆく心を
ひとのせいにはするな
みずから水やりを怠っておい

気難しくなってきたのを
友人のせいにはするな
しなやかさを失ったのはどちらなのか

奇立つのを
近親のせいにはするな
なにもかも下手だったのはわたくし

初心消えかかるのを
暮らしのせいにはするな
そもそもが ひよわな志にすぎなかった

駄目なことの一切を
時代のせいにはするな
わずかに光る尊厳の放棄

自分の感受性くらい
自分で守れ
ばかものよ

□21世紀を生きる君たちへ

さらに補足です。亡くなった作家の司馬遼太郎氏は、大塚書籍という教科書会社から依頼され、「21世紀を生きる君たちへ」というのエッセイを残していますが、彼の気持ちが切

実に分かります。司馬遼太郎が子供たちに託したメッセージをぜひ読んで下さい。

21世紀を生きる君たちへ

私は歴史小説を書いてきた。もともと歴史が好きなのである。両親を愛するようにして、歴史を愛している。

歴史とはなんでしょう、と聞かれる時、「それは、大きな世界です。かつて存在した何億という人生がそこに詰め込まれている世界なのです」と、答えることにしている。

私には、幸い、この世にすばらしい友人がいる。歴史の中にもいる。そこには、この世で求めがたいほどにすばらしい人たちがいて、私の日常を、はげましたり、なぐさめたりしてくれているのである。

だから、私は少なくとも二千年以上の時間の中を、生きていくようなものだと思っている。この楽しさは一もし君たちさえそう望むなら一おすそ分けしてあげたいほどである。

ただ、さびしく思うことがある。私が持っていない、君たちだけが持っている大きなものがある。未来というものである。

私の人生は、すでに持ち時間が少ない。例えば、二十一世紀というものを見ることのできないにちがいない。

君たちは、ちがう。二十一世紀をたっぴり見るができるばかりか、そのかやかししいない手でもある。

もし「未来」という町角で、私が君たちを呼びとめることができれば、どんなにいいだろう。「田中君、ちょっとうかがいますが、あなたが今歩いている二十一世紀とは、どんな世の中でしょう。」

そのように質問して、君たちに教えてもらいたいのだが、ただ、残念にも、その「未来」という町角には、私はもういない。

だから、君たちと話ができるのは、今のうちだということである。

もっとも、私には二十一世紀のことなど、とても予測できない。

ただ、私に言えることがある。それは、歴史から学んだ人間の生き方の基本的なことでもある。

昔も今も、また未来においても変わらないことがある。そこに空気と水、それに土などという自然があって、人間や他の動植物、さらには微生物にいたるまでが、それに依存しつつ生きているということである。

自然こそ不変の価値なのである。なぜならば、人間は空気を吸うことなく生きることができないし、水分をとることがなければ、かわいて死んでしまう。

さて、自然という「不変のもの」を基準に置いて、人間のことを考えてみたい。

人間は一くり返すようだが一自然によって生かされてきた。古代でも中世でも自然こそ神々であるとした。このことは、少しも誤っていないのである。歴史の中の人々は、自然をおそれ、その力をあがめ、自分たちの上にあるものとして身をつつしんできた。

この態度は、近代や現代に入って少しゆらいだ。一人間こそ、いちばんえらい存在だ。という、思いあがった考えが頭をもたげた。二十世紀という現代は、ある意味では、自然へのおそれがうすくなった時代といっている。

同時に、人間は決しておろかではない。思いあがるということとはおよそ逆のことも、あわせ考えた。つまり、私ども人間とは自然の一部にすぎない、というすなおな考えである。

このことは、古代の賢者も考えたし、また十九世紀の医学もそのように考えた。

ある意味では平凡な事実すぎないこのことを、二十世紀の科学は、科学の事実として、人々の前にくりひろげてみせた。

二十世紀末の人間たちは、このことを知ることによって、古代や中世に神をおそれたように、再び自然をおそれるようになった。

おそらく、自然に対しいばりかえっていた時代は、二十一世紀に近づくにつれて、終わっていくにちがいない。

「人間は、自分で生きているのではなく、大きな存在によって生かされている」と、中世の人々は、ヨーロッパにおいても東洋においても、そのようにへりくだって考えていた。

この考えは、近代に入ってゆらいだとはいえ、近ごろ再び、人間たちはこのよき思想を取りもどしつつあるように思われる。

この自然へのすなおな態度こそ、二十一世紀への希望であり、君たちへの期待でもある。そういうすなおさを君たちが持ち、その気分をひろめてほしいのである。

さて、君たち自身のことである。君たちは、いつの時代でもそうであったように、自己を確立せねばならない。

一自分にきびしく、相手にはやさしく。という自己を。

そして、すなおでかしい自己を。二十一世紀においては、特にそのことが重要である。

二十一世紀にあっては、科学と技術がもっと発達するだろう。科学・技術が、こう水のように人間をのみこんでしまっではならない。川の水を正しく流すように、君たちのしっかりした自己が、科学と技術を支配し、よい方向に持っていったほしいのである。

右において、私は「自己」ということをしきりに言った。自己といっても、自己中心におちいつてはならない。

人間は助け合って生きているのである。私は、人という文字を見ると、しばしば感動する。ななめの画がたがいに支え合って、構成されているのである。

そのことでも分かるように、人間は、社会をつくって生きている。社会とは、支え合う仕組みということである。

原始時代の社会は小さかった。家族を中心とした社会だった。それがしだいに大きな社会になり、今は、国家と世界という社会をつくり、たがいが助け合いながら生きているのである。

自然物としての人間は、決して孤立して生きられるようにはつくられていない。

このため、助け合う、ということが、人間にとって、大きな道徳になっている。

助け合うという気持ちや行動のもとのものは、いたわりという感情である。

他人の痛みを感じることも言ってもいい。やさしさと言いかえてもいい。

「いたわり」
「他人の痛みを感じること」
「やさしさ」

みな似たような言葉である。この三つの言葉は、もともと一つの根から出ているのである。

根といっても、本能ではない。だから、私たちは訓練をしてそれを身につけねばならないのである。

その訓練とは、簡単なことである。例えば、友達がころぶ。ああ痛かったらうな、と感じる気持ちを、そのつと自分の中でつくりあげていきさえすればよい。

この根っこの感情が、自分の中でしっかり根づいていけば、他民族へのいたわりという気持ちもわき出てくる。

君たちさえ、そういう自己をつくっていけば、二十一世紀は人類が仲よしで暮らせる時代になるにちがいない。

鎌倉時代の武士たちは、
「たのもしさ」

ということ、たいせつにしてきた。人間は、いつの時代でもたのもしい人格を持たねばならない。人間というのは、男女とも、たのもしくない人格に魅力を感じないのである。

もう一度くり返そう。さきに私は自己を確立せよ、と言った。自分にきびしく、相手にはやさしく、とも言った。いたわりという言葉も使った。それらを訓練せよ、とも言った。それらを訓練することで、自己が確立されていくのである。そして、「たのもしい君たち」になっていくのである。

以上のことは、いつの時代になっても、人間が生きていく上で、欠かすことができない心がまえというものである。

君たち。君たちはつねに晴れあがった空のように、たかかとした心を持たねばならない。

同時に、すっしりとたくましい足どりで、大地をふみしめつつ歩かねばならない。

私は、君たちの心の中の最も美しいものを見つづけながら、以上のことを書いた。

書き終わって、君たちの未来が、真夏の太陽のようにかがやいているように感じた。